セミナリオ

白神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セミナリオ

【Ｎコード】

Ｎ５１６２Ｚ

【作者名】

白神

【あらすじ】

主人公・子無舞久は神軍に徴兵されそうになるが幼馴染みのおかげで徴兵は免れる。だが舞久は抵抗するために幼馴染みと融合し女になってしまう。元に戻るための方法を探すため子無舞という名で京都にある神軍に対抗する者達を育成する魔法学校に転校する。神に抗う一人の少年の物語―

プロローグ―神からの挑戦状（前書き）

初めてなのでよろしくお願いします。

プロローグ―神からの挑戦状

神は人間に能力を与える。それは特定ではなく、平等に与えられる。
だが歳をとるにつれて
その能力は弱小化し消える
だがその能力をとどめる者も存在しその者達は一様に苗字に「神」
の言がある

その者達は自分では能力の存在を認識できない。
そして彼らは１５歳になった時
神に神軍に招集されて
死ぬまで戦う運命を背負う
つまり神は人間に能力を与え熟すと神軍に誘う

だが神も猶予を与える

ある挑戦状を送り付ける

それに勝てば招集は拒否される。
そして能力も変わりなく
存在する
ところが勝利したものはいない
彼が現れるまでは…

さてこれから始まるのは
神の挑戦に打ち勝ち、神に仇なした少年の物語―

――――――

９時２０分　７月

蝉が縦横無尽に鳴き喚いている
松尾芭蕉の俳句にも蝉について詩ってたなと思ったが今は関係ない。

今の俺には不快でしかないなぜなら来たからだ
手紙が

学校に行ったら靴箱に手紙が入ってて女の子からのラブレターかなと思ったら魔王からだったみたいな
そんな感じ

そして学校から出て
手紙を確認する

書かれていたことは

「手紙を受け取ったと同時に1時間の猶予を与える。当事者は時間内に世界で一人だけ当事者を覚えてくれる人物を探す。
もし見つけることができれば生き残り、できなければあなたを狩りに行きます。幸運を。」

いたずらだと思ったが
念の為だ
友達に電話しようと携帯をだし電話した。

だけど
「誰？」と冷徹にことごとく言われた

もちろん電話帳にあるやつ全員に電話した。
でも全員出なかった。
たぶん全員の携帯に俺の連絡先はないだろう。
だからみんな知らない電話番号からだから出なかったんだ
「母さんと父さんなら…」
そう思ったが
母さんと父さんはもう死んでいる。
俺が6歳の時に交通事故でだ
それに双方のじいちゃんとばあちゃんも死んでる。
だから俺は
「世界で一人か」
絶望した
泣きそうだ。
その時俺の頭の横を蝉が
通り抜けた。
俺は反射的に頭を上げた。
「綺麗だな」
今俺がいるのは丘の上
ここから眺める景色は
本当に綺麗だ。

それに今は夏で入道雲が
厳かに浮いている。

「この景色もこれで見納めか…」
どうせ俺は世界で一人と俺が人生最大の憂鬱を迎えた時

「……ま……会おう……」
脳の中で声が響いた
そして映像が流れる。
今俺がいる同じ丘で黒髪ロングの少女が囁いている。容姿端麗の少女は笑いながらでも切なそうに…
と、そこで我に返った。

「なんだ?今の…」
おかしい気分だ。全然知らないと認識できればいいのに俺は知ってる。
名前も思い出せない
でも…
彼女なら俺を憶えているかもしれないと思ったが
俺が忘れてるんだ
憶えているはずないじゃないか

「はあ　俺本当に独りだ…」

「み〜つけた。」
陽気な声が聞こえ、後ろを振り向く。

そこには、黒と白を基調とした制服のようなものを着た髪をツインテールに束ねた少女が立っていた
俺と同じくらいの歳だ

「まさか…」

見覚えはないが俺のことを憶えているのかと期待したが悉く崩される。

少女は鎌を持っていた

そして

「あなたを狩りに来ました♪」

人生の終了を告げる悪魔が立っていた。

プロローグ―神からの挑戦状（後書き）

ちょっと変なところで終わりましたが区切りが良かったので終わりました。
主人公の名前は次回判明します。
次回もよろしくお願いします。

最初の抵抗（前書き）

読んでいただければ幸いです。

最初の抵抗

ツインの少女が宣告して3分くらいが経った。
俺は我に返り言葉を紡いだ。
「嘘だろ…だって時間は！」
「もう時間は経ちましたよ。きずかなかったの？悠長ですね～～」
くそっ俺が鬱期に入ってるうちに時間が経ってたのか
でもどうせ無理だったし、悔しがっても仕方ないか。すると俺の気分とは対称的な声で少女が、
「じゃあ狩らせていただきます。」
と言い、ゆっくりと俺の所に歩いてきた。

――――――――

同時刻

丘を登る道を黒髪ロングの大和撫子を彷彿とさせる少女が走っている。
かなり急な坂をもはや人間の成せる速度を超越した早さで走っている。

徐々に進んでいくと、遠くに2人の人物を把握することができた。
1人は男でもう1人は鎌を持った少女。少女はゆっくりと男に近づいている。少女はその異質な光景をみても動じない。そして彼女は少し安堵した表情を見せたがすぐに真剣な表情に戻る。
「……舞久……」
速度を更に上げ、走って行った。

――――――――

ツインの少女は、男の前に立ち
「私の名を言っておきます。私は、エルン・ディライト以後おみしりおきを」
「俺の名前は…」
礼儀だと思い名前を言おうとしたがエルンに止められる。」

「知ってる～子無舞久でしょ～なんで苗字に神の言がないのに神軍に招集されるのか知らないけど」

「は？神軍って…」
俺は聞こうとしたがエルンは不敵に笑い
「これも仕事ですから♪」その言葉と同時に
鎌が振り下ろされる。
目をつぶった。そして
ジシッ
鈍い音が鳴り静寂が訪れ、俺は目の前を見て驚愕した
長い黒髪をなびかせ俺と同じ制服を着た少女が立っていた。
少女は俺の方に向き
優しく微笑んで、
「久しぶり　舞久、また、会えたね」
その笑顔を見て
すべてを思い出した。その黒髪少女のことを

――――――――
俺には幼馴染みがいた。
だけど幼馴染みは俺達が中学に上がると同時に引っ越しした。
その引っ越し前日に俺達は丘の上で話していた。

「もう会えないね。ここは東京で私は九州にいくしさ」

「そんなことないだろ。どうせ日本にいるんだからさ」
「うん、そうだね。会おうと思えば会えるよね。
舞久が来てよね。待ってるから」

「ああ、なんならジェット機で会いに行ってやるよ。」
「うん、またいつか会おうね。」
幼馴染みは嬉しそうに楽しそうにだけど泣きながらいった。

――――――――
光速のように記憶が蘇る。俺には幼馴染みがいた。
それがこの黒髪少女だ。
名前は…
「……守（まもり）……」そう幼馴染みの名前は
神瀬川　守
「お前まさか…」
「そう、私は神軍に招集された。でも舞久も招集されるのを知って助けに来たの。」「な…」
マジかよ…守も
「へ～そうか。帰世権を使ってこの世界に来たんだ。でも、あれは1回だけしか使えないのに」
「それでも、舞久を助けたかった。」
「だけど、いままさに神軍に招集される者を助ける、まあ、阻止すれば罪になる」
「ええ、わかってるっけど」守はエルンを蹴り、エルンは避け、後ろに跳んだ。
守の手には、鎌を防いだこと傷ができていて血が出ていた。
エルンが若干叫びながら
「それでどうするの！♪
私と…」
「戦うわ」

守が冷静に言う。
「舞久と二人でね。」
俺は、即座に意義する。
「ちょっと、守！
何言ってんだ！あんな鎌持った奴に勝てるわけないだろ！」
「今の舞久ならね。でも」守は、俺に手を差し出す。「私の能力があれば、行ける。私を…信じて」
俺が迷う暇はない
もうこれしか方法がない。「分かった。守が言うんだからな。」「ありがとう。じゃあ手を握って」

そして手を握った。
瞬時に空間が歪み、電流が走る。だがすぐに収まり煙が立ち込める。

「な…」
エルンは驚愕の色を隠せない。

「俺は、さっき生きることを諦めたが、前言撤回だ。神軍がなんだ？んなもん
潰してやる。」

そこには、刀を持った白髪の美少女が立っていた。

最初の抵抗（後書き）

マンガで例えるとまだ1話もいってない。ヤバイ

女になった男（前書き）

ご感想お願いします。

女になった男

日本刀を持った白髪の少女が口火を切った。
「なんで女になってんの？」白髪の少女＝舞久みたいな少女の体は当然女らしい体だが
「胸に膨らみがあるし、なにより、勲章が、俺の男である存在証明が…」
『ないね。』心の中で守の遠慮がちな声が聞こえる。
「まさか、嘘でしょ？融合するなんて…」
エルンが驚愕している。

「勲章が…俺の…」
「融合すれば、必然的に能力の高い者の特徴が繁栄される。だからあなたはいま女の子の姿ってわけよ。」「そういうことか。原因を知れて良かった。」
『立ち直ったか』
「まあ、今は目の前のこと集中するか」
舞久は刀を強く握り、体勢を低くする。
「私に勝てるかな？」
エルンは腕時計をさりげなく確認し、戦闘態勢に入る。
『守、この刀は卍か…』『無理』
「だよな、じゃあ戦るか」「後悔しないでね～」
そして、同時に土を蹴り
キィン
刀と鎌が衝突し、
「意外に速いね～」
「俺も驚いてるよ」
『確かに身体能力、反射神経は格段に上昇している。だけど、まだ…』

「だけど、まだまだだね。刀も振るったことがないのに意気がってんじゃねえよ」「な…」
エルンは鎌で連続的に切り掛かる。舞久は防戦一方で押されていく。
「私は！お前みたいな目をしてる奴が！嫌いなんだ！反吐が出る！」
舞久は防御しながら、確実に押されているが、あきらめてはいない。
舞久の目は言うなれば、青空の如く、全く淀んでいない目でエルンを見据えている。
「私は！「うるせえ」
鎌を最大限に振りかぶったエルンを舞久が言葉で制した。
「うあ……」「隙あり」
比較的美少女な容姿をしている少女が男勝りな言葉を吐いたことでエルンは硬直してしまった。
舞久はそこを見逃さずに
刀を斬り付けた。
ザァン
「ぐはあっ　く…そ…」
血が溢れ、エルンは倒れ伏す。
「はあ…はあ…勝った」
『本当に勝ったんだ！』

「はあ…もう時間だよ」
エルンがそう呟くとエルンの元に魔法陣が形成されエルンは魔法陣に沈んでいく
「これで勝ったと思ったらダメだよ、はあ…あなた達のことは全ての神に知れ渡る。覚悟しときなさい」
そして、エルンは魔法陣に沈んだ。
蝉の鳴き声が耳に入ってくる。それで今が夏ということ思い出した。
「あっつう、汗だくだ～
……まあとりあえず終わったな」

そう言いながら町の景色を眺める。
『やっぱり綺麗だな～いつ見ても…本当にきれい』
今までに見た中で一番綺麗かもしれない。

「さてとそろそろ元に戻ろうぜ、疲れたし寝たいんだよ」
『ああ～それなんだけど～』と守が口籠もる。
「なんだよ、早く戻ろ…『戻れないんだ』え？！」
戻れないってことは女の姿で暮らすということに…

「ぐあああああああ！
俺の男の勲、チ〇コは元に戻らないのか！」
『ちょっ普通にそんなこと言わないでよ！変態』
守の言葉に激怒したのか目を最大限に開け、「女には分からないだろうなあ！あれを亡くすということは一流企業の社長が突然ニートになるぐらいの絶望なんだよ」と叫んだ。

『うう～～、ちゃんと元に戻る方法を考えるから』
「え、戻れんの？それを先に言えよ」舞久は安堵した。
『でも、この町からは、離れないといけないけど…』「ああ、分かってる。」

『じゃあ、帰ろう。』
そして、舞久は歩きだした依然と蝉が鳴き、入道雲が浮いていて典型的な夏のイメージを具現している。
「うるせえな、蝉は」
だが今は、蝉の声を不快には思わなかった。

女になった男（後書き）

やっと漫画でいうと1話が終りました。これからもっとまとめられるように頑張りたいと思います。これからもよろしくお願いします。

子無舞というキャラ作り（前書き）

感想お願いします

子無舞というキャラ作り

俺の男の勲章がなくなり
１日が経った。
昨日疲れすぎて家に帰ってベッドにインした。
おかげで汗臭い。なので
風呂に入ろうとした。
だがそこで俺は自分の体が女であることを思い出した。
最初は戸惑った。そりゃ俺も一応理性がある。
そんな変態的行為には決して走らない。俺を甘く見るな。だが風呂に入りたいという欲望は止まらない。
そこで俺は決断した。

「そうだ。風呂に入ろう。」
『ダメ～～～～～～～～』そこで俺の意識が途絶えた
――――――――――――

目が覚めたら、眠っていただがさっきとは、明らかに違うのは体からすごいいい匂いがした。
『起きた？』「ああ、それよりお前が体洗ったのか？」『そうだよ！舞が変態の架け橋を昇ろうとしたから』「俺は変態じゃないしそれに舞って呼ぶな。まじで女じゃないか」
『何言ってんの？今日から舞久は子無舞として生活するんだよ』
「へ～すげー頑張ってね」『舞ちゃんはこれから神と闘うために訓練する学校に通うからね。』
何言ってんの？この子　医者も逃げ出すレベルだよ

『現実逃避しても無駄、そこには、元に戻る方法があるかもしんないのになあ～』
「守様いえ女王我に何なりと」

『あなたには学校に通う前にある特訓をしてもらうわ』

『女の子のお話練習〜♪』

――――――――

鏡の前に立っているのは

白髪の美少女　子無舞

「さてお前が好む女のイメージは？」

『う〜ん、舞が好きなのでいいよ』

じゃあまずは、上から目線のポーズをとり

「別にあんたのために作ったんじゃないんだからね」『何で、ツンデレなの。わたしそんなのいや』

う〜ん、じゃあ

「お風呂にする？ご飯にする？それともわ・た・し」『いやだ。もっと清楚な感じがいい』

じゃあ、

「あなた達、早く登校しなさい。」

『う〜ん、まあまあね。』生徒会長みたいな感じか…

「では、このような話し方でいいのですか？」

『うん、そんな感じ

やればできるじゃない！』

そして子無舞のキャラができあがった。

だが舞久は分かった。

というか自覚した。

「俺は変態なんだ。現在進行形で変態ｉｎｇしてる。」『それは前から』

誰か打開策があるなら

俺に教えてくれ！

子無舞というキャラ作り（後書き）

次回セミナリオの意味が判明　ヒントはフランシスコ・ザビエル
日本史ができる人ならわかるでしょう。
それではこれからもお願いします

第一章―そうだ。京都に行こう（前書き）

学園編が始まります。

第一章―そうだ。京都に行こう

現在俺は京都に行くために電車に乗っている。
なぜ電車に乗っているのかそれは、学校が京都にあるからだ。その学校名はセミナリオ、日本語で神学校という。セミナリオでは魔法は必修科目らしい。まあ普通に国語や数学等の教科も勉強する。そして、やはりランク付けがなされている。能力値をランクに表し、クラス分けするんだろう。セミナリオの概要は分かったし後は学校に着いてからにいろいろ聞くか。
それより、今日早く起きてまだ眠いし京都に着くまで寝ておこう。

――――――――――

京都

「やっと着いたな。修学旅行ぶりか」
『京都タワーだ。東京タワーよりはちっさいね』
京都タワーが小さいのは、京都の景観を損わないようにするために景観法が作られたから小さいんだ。
『ほ～う、そういうこと、まあ神社とか寺がいっぱいあるからね。』
余談している間に京都駅のバスターミナルでバスに乗り、かの有名な平安神宮に行った。平安神宮には赤い鳥居がある。その鳥居がセミナリオの門らしい。

バスに数十分経ち、平安神宮の赤い鳥居の前のバス停に着き、バスから降りる。
「これがセミナリオの門」『舞行こう』

そして、半信半疑ながらも鳥居をくぐった。
すると、さっきまで日本風の景色が広がっていたのに目の前には、

ヨーロッパ風の景色が広がっている。正面にすごいでかい建物がある。多分あれが学校だろう周りにもいくつかの建物があり、人が出入りしている『まずは、職員室に行きましょ』「そうだな」
『ダメ、ここでは、もう女言葉よ』
「ごめんなさい。気を付けるわ」
そして、学校に入る。
（学校に入るまでに通りすがりの人達にチラチラ見られた）正門の受付で転校生という証明証をもらい、
「職員室に行って担当になる先生に証明証を渡して下さい」と受付の女の人が言った。「はい、分かりました」「では、学校にお入りください」そして、学校に入り案内板を見て職員室に向かった。
すると、職員室の前の椅子に女の人が座っていた。
黒髪でスーツを着ている。女の人は、こちらを向き、「子無舞、日本人、能力値は、これは驚いた。ＫＩＮＧか」ここで説明、能力値は５つにわかれ、ＴＥＮＴＨ　ＪＡＣＫ　ＱＵＥＥＮ　ＫＩＮＧＡＣＥと名付けられている。そして俺は、ＫＩＮＧか。
「はじめまして。お前の担任の神野麗だ。よろしく」「あ、はいよろしくお願いします」
神野（かみや）先生はそういうと
キーンコーンカーン
鐘が鳴り、「おっと、早く行こう。生徒達が待ってる」と言って歩きだし、エレベーターに乗った。
エレベーターの中では無言重い空気が流れたがふと、疑問に思った。
「あの先生、どうやってわたくしの能力値を測ったんですか？」
「ん、受付のところでだが」あそこか…「まあ証明証が能力値を判定する」と言って俺から証明証を取り掲げた。そこには、ＫＩＮＧと書かれていた。
エレベーターから降り廊下を歩き、教室の前を通過する。７組　６組　５組の前に立ち止まった。

「ここがお前のクラスだ、私が入れと言ったら、入ってこい」と言いながら
ドアを開けて、
「席に付け～……ええっと今日は転校生が来ている。まあまあ特殊なやつだがな」おい聞こえてるぞ、特殊ってなんだ。
「入れ」
俺は深呼吸し・ドアを開けた。クラスは３０人くらいいる。クラス全員がこっちを向き、少し戸惑うが今俺は子無舞、こんなことでひるまない。そのまま、教壇に立ち、自己紹介した。

「わたくしの名は子無舞です。趣味はアニメ鑑賞とスポーツ　能力値はＫＩＮＧよ！」
クラス全員が驚愕していた。

「もしかしてまちがった？」『スリーアウト、チェンジ』守の呆れた声が俺の心を侵食した。

特殊な転校生（前書き）

人物の名前を決めるのは難しい

特殊な転校生

男は完全に間違ったと思った。誰がどう見てもこの殺伐とした光景をみればそう思う。そして俺がもう1回教室に入る所からやり直そうと決意した時
一番後ろにいるオレンジの髪の陽気そうな男が
「子無って苗字に神の言がねえじゃねえか」
どうやら、俺の苗字に驚愕していたようだ。
確かに能力を引き継げるのは必ず苗字に神の言があるものだけだ。
つまり、俺の存在は今までの常識を覆すことになる。

「だから、言っただろう。特殊だと」「いや…でも」と一番前の席にいるクリーム色の髪をポニーテールに束ねた女子が何か言おうとしたが「では、子無はあそこの真ん中の席に座れ」と言われ俺は席に着席した。
「じゃあ、お前ら仲良くしろよ。そして切磋琢磨しろ。」と言って先生は教室を後にする。それと同時に一斉に俺の席に１０人くらいの女子が集まった。

「子無さんて神の言がないのにＫＩＮＧクラスってすごいね」「そんなことないよ、あと舞でいいよ」よし、これで親近感を持ってもらえる。「でも子無って苗字珍しいね」「白髪なんて初めてみるよ」と矢継ぎ早に質問され、疲れた。

少し落ち着くと
２人の男子が近寄って来た。「よう、俺神民滝人っていうんだ。ランクはＫＩＮＧだ」とさっきのオレンジ髪の陽気そうな男が言い「そして僕が神東時彦（かんどう）だ。ランクは同様にＫＩＮＧよろしく」と眼鏡を掛け博識そうな雰囲気を醸し出しながら言った。

「よろしくですわ」
と言ったがふとなんでわざわざ女子に自己紹介してくるんだ？と思ったがすぐに理由が判明した。
「僕はクラスの代表でね。先生に学校を案内してやってくれたと頼まれたんだ」と時彦がめんどくさそうに言い「それで俺が副代表なんだ」と滝人が笑いながら言った。
「それで昼休みに学校を案内するから覚えておいてくれ」と時彦が眼鏡の位置を直しながら言った時
「私達も行く～」と言いながら3人の女子が近づいてきた。
一人はさっきのクリーム色の髪をポニーテールに束ねた子、そして背が低く少し童顔のピンクの髪をおさげにしている子に制服じゃなくてコスプレの服を着ている銀髪の子がやって来て
上の順に自己紹介して行く
「私は神茂空理（かみもくうり）です。ランクはQUEENです」と空理が言い
「そして私が鳴神社（なるかみやしろ）。ランクはなんとACEなのだ」と小さい胸を張りながら言い「最後に我が九神夜音（ここのかみやいん）だ。ランクはKING」と自己紹介が終り、空理が遠慮がちに
「私達も一緒に良いですか？」と時彦に聞き「女子がいた方が安心だ」と承諾した。

そのあとはとりとめのない話しをして授業開始のチャイムが鳴った。

――――――――――――

通常授業（国語や数学等）はまだ大丈夫だったが
魔法が意味不明

魔法にはジャンルがあり
攻撃魔法　防御魔法　回復魔法　環境魔法　移動魔法そして拘束魔法がある。
もっと細かく分類されるがこれが大幅なジャンル分けだ。今日の授

業では攻撃魔法の基礎知識を勉強していたが開始5分で現実逃避した。

――――――

昼休み

学校を案内してもらい今は闘技場にいる。

そして俺は初めて闘技場を見ていたから興奮していた「すごいわ！こんなの初めて見た」「そうか？そんなに驚くことでもないだろう」と時彦が若干引きながら言った。すると、社が
「じゃあそろそろはじめまよう！」といい闘技場から出ていく。他の皆も出ていく中で時彦が「子無お前は残れ」と少し真剣な表情で言った。

「えっといまから何を？」と舞が聞いた。
そして時彦が
「召喚　承認」といい
両手にハンドガンを握り、銃口を俺に向け、
「力試しだ」
時彦は引き金を引いた。

誇りを胸に（前書き）

お読みください

誇りを胸に

ドオン

時彦の射撃した銃弾が舞の後ろで爆発した。

「ほおう、避けたか、少し移動魔法で弾の速度を上昇させたんだがな」時彦が弾を装填させながら言った。「いきなり何をするんですか？」「クラス代表にはある権利が与えられる。それは交戦権だ。代表は双方の同意を得ずとも交戦できる。だがそれには理由が必要なんだ」と銃を指でまわしながら話し続ける。

「理由は　何？」

時彦は笑いながら

「お前が本当にＫＩＮＧクラスか確かめるためだ。」

くそっめんどくさいな

『でも、あれじゃ引き下がらないよ』

戦うしかないか

守、武器貸してくれ

『はいは～い、じゃあ

刀　出すね』

「いいわよ、戦うわ」

そして、魔方陣が出現し刀が現れる。

「日本刀か…てっきり槍とかだと思ったが」と時彦がいい同時に銃口が再び舞に向けられる。

「さてハンデはなしだ。お前が魔法を使えなくとも、全力で行くぞ。まあ、１０秒で終わるがな」

「ん…来なさい」

―――――――――
観客席

そこで滝人　空理　社　夜音が眺めていた。
すると、社が
「舞が負けるね。絶対に」そして　滝人が
「ああ、そうだな　例え同じＫＩＮＧクラスでも魔法の扱い方で変わっていく」
「例えるなら、どれほど性能のいいＰＣを持っていてもＰＣの基本技術がなければ
意味がない」と夜音が頷きながら言う。「そうだね。でも、どうかな…」と空理が言う。

「まあ舞が負けるのは確定だけど、どれだけ持ち堪えられるかな～」
と社が怪しげに微笑んだ。

―――――――――
闘技場

「では、戦闘を…」
時彦がトリガーに指をかけ舞は態勢を低くする。
そして
「開始する」
時彦の開始の言葉とともに時彦がトリガーを引く
「避けられるかな」
「な…」
ドゥァァ
さっきの魔法弾の５倍の速度と威力で舞に突撃した。
「さっき、お前と会話している間銃を指で回転してただろう。あれは、癖でもなんでもない。あの時に移動魔法と攻撃魔法をかけた。

まあ、気付かなくて当然だ。魔方陣を形成させず魔法を発動したからな。避けるのは難しいだろいな」
時彦は魔法の技術では上位にいる。魔方陣を形成せずに魔法を撃つことはサッカーでいうとゴールキーパーが相手ゴールにシュートを入れるぐらいに難易度が高い。

「うるさいわね…女の子に手加減できないの」
頭から血を流しながら言った。その光景に時彦は一瞬動揺したが笑いながら
「防御魔法なしで防ぐとは末恐ろしいが、勝負は決した。僕の勝ちだ。」と言い銃をしまおうとするが、

「まだ…はあ…終わって…ない！」舞は、刀を強く握る。『舞！ダメだよ！無理しないで、魔法が使えないんだったら仕方ないよ！」悪いな守、男には譲れない誇りが、あるんだ。

「まだ戦う気か…まあその覚悟だけは評価しよう。だがお前は僕より弱い、つまり僕には勝てない。分かるだろう」時彦の言葉に舞は微笑んみ、「確かに私は弱い。でもみすみす負けを認めるような脆弱な心は持ち合わせていない」舞もとい舞久は死んだ父に昔教えてもらったことがある。
《人が負けを認める時は誇りを汚すことだ。だから、どれだけ傷を負っても誇りを胸に戦え》剣道をしていた父の教えだ。
舞久は今でもその教えを守っている。だから、
「俺は！」　剣を構え、イメージする。さっきの時彦の射撃した弾にかけた移動魔法を速く、素早く動く自分を
「誇りを胸に戦い続ける！」舞の言葉に「な…！？」時彦が怯んでいる間に

「あなたの移動魔法、参考にさせていただきましたわ」
舞は瞬時に時彦の後ろに周り、刀を斬り付けた。
だが
キンッ
「な…」「防御魔法を展開した。少し驚いたが、無陣法で魔法を使える僕には効かない」
時彦は舞に向け射撃する。「ぐっ　、くそ」
舞は血を出しながら倒れ伏す。
「子無舞か…何者なんだ。さっきの男勝りな言葉も何かあるな」時彦が戦闘の余韻に浸っている。静かになった闘技場まで今まできずかなかった野次馬の声が響き渡っていた。

決意と不安（前書き）

お読みください

決意と不安

目が覚めたら保健室にいた。もう外は暗闇に包まれている。闘技場で戦っていたのは昼だからおよそ6時間ぐらい寝ていたことになる。体の傷は治っている。回復魔法で治癒したのだろうと俺が状況整理していると『舞、もう大丈夫？』と守が話してきた。

「ああ、大丈夫だ。」

と俺が言うと、『そう、ならいいよ』と安心しながら『でも！舞？あなた男言葉で叫んだでしょ！』

「感情が高ぶったんだよ。次からは気をつける」確かにあの時はちょっとヤバかったな……『あのさ舞さ、あの時お父さんのこと思い出してたでしょ』「ん…はあ…なんでも見えるんだな…確かにあの時父さんの言葉を思い出した。もう今はいないけど…」『凄く恐かったけど優しい人だったね…』「ああ…」と切ないムードが漂っている時

カーテンが開かれ

「おっつ～～～～♪やっと起きたね」と社が子供のような無垢な笑顔で言って来たその後俺の横にある椅子に座った。「いろいろ聞きたい事があるんだけど、今はひとまずホテルに行こう。そこが生徒達が暮らす寮だから」と言い終わった後椅子から立ち俺が立つのを促す。「早く行こ　私達同じ部屋だから」「えっそうなの？」「うん、まあ4人部屋で空理と夜音もいるから、皆待ってるよ！」と舞の手を引きながら、ホテルに向かった。

――――――――

ホテル

舞が泊まる部屋は１５１７号室

部屋に入るとまず女子独特の甘い匂いが鼻腔をくすぐる。社に背中を押され入るとパリのホテルのようなデザインをしている部屋が広がっている。広さは教室ぐらいある。ベッドが４つあり、画面の大きい液晶テレビが設置されている。その他にシャワー室　キッチン　と最低限の設備がある。

ベッドには空理と夜音が乗っていて、こちらにきずいたのか寄って来て

「お疲れ様です。大丈夫でしたか？」「うん、大丈夫よ！」と空理が聞いてきたので軽く応対した。

「しかし、神東は女子にも容赦ないな」と夜音が同情して言ったが

「ううん、手加減はしてたと思う」俺が戦ってたんだ。あいつが手加減してたのなんてすぐに分かる。「私、もっと強くならなきゃ」俺が決意した時「魔法教えてあげてもいいよ！」と社が少ない胸を張りながら言う。確か社はＡＣＥランクだ。全然強く見えないというか小さいから子供にしか見えない

「今変なこと考えたでしょ」と社が頬を膨らまして言う。「ううん、ただやっぱり頼りになるな、社は～と思ってね」と舞が言い「でしょ！私は頼りがいのあるお姉さんなのだ」と社がご満悦にいうが皆

「それはない」と思っている。

だが社に教えてもらった方が授業より効率がいい。

「それでいつから「その前に！」と社が叫ぶ。

「私、さっき舞に聞きたい事があるって言ったよね？」「うん、確かに」

「あのさ私が聞きたいのは～」と社がドアの方にいき鍵をかける。

俺はいやな予感しかしなかった。そして、案の定予想は当たった。

「舞は～男だよね？」

社は奇妙に笑い、ゆっくりと近づいてきた。

子無舞の正体（前書き）

お読みください

子無舞の正体

俺は呆然とした。
がすぐに弁明する。
「男って何その冗談？私は胸もある、完璧な女よ！」「嘘だね」社は一歩も譲る気は無いみたいだ。
俺は社を説得するため
空理と夜音に助けを求める「空理も夜音も何か言って！」だが「それは無理だ。ああなっては論破するしか方法がない」と断られる。
くそっどうする！おい、守！
『もう終わった、もう終わった、もう終わった』
壊れてるな…

仕方ない、論破するか。
「私がなんで男だと思ったの？」まずは根拠を聞かないとな。
「闘技場での男言葉」
やっぱりな…「それだけで私が男だとでも思ったの？」社はベッドに座り、「そんな分けないじゃん」と言った。
「これからは話しが長くなるんだけど～」と言い社の論破が始まる。

「まず私は観客席を後にして、すぐに神東君の所に行った。そして、あなたのことどう思うって聞いたら「怪しすぎる。だから少し探ろうと思う。鳴神、お前来るか？」って言われたから行く～て言ったの。てっきり図書館とかいくのかな～って思ったらなんと地下の指令部に来たんだけど、指令部は職員と各クラス代表そして、生徒会長しか入れない。そのまま神東君が入ったから、私が外で待ってたら、一枚の紙を持って出てきてさ神東君に聞いたら「これを見てくれ」って言われたから見たら、名前がいっぱい書かれてた。そしたら赤い文字で書かれた名前があった。その紙は1日に神軍に招集さ

れた人達の名前が記されたもので、赤い文字は、まだ招集されていないという証拠、指令部でも話題になってるって神東が言ってたわ。そしてその赤字で書かれた名前は、子無舞久」「あ…」と空理が俺を見る。

「そして、神東君が推理したわ。「まず僕からの見解を言おう。子無舞は融合した結果、形成された人間だ。通常、融合は同じ能力値の者達が成功できる魔法だ。だがそれでも双方の魔法技術が相当なものではなかったら成功率は低下する。この子無舞久は、女と融合したが同等の能力値ではなかったため体は女になり、おそらく、精神は完全に子無が乗っ取っている。今日の朝からだが、子無の一人称はわたくしから私(わたし)に変わっている。多分、まだ女に馴れていないのだろうな。つまり、子無舞は、子無舞久と謎の女の融合体だ」とね。どう子無舞、いや子無舞久君。」

全問正解だ。というか神東はコナンか。頭きれすぎだろ。

『もう言っていいよ。本当の事』…分かった。

守が覚悟して、俺も決意する。そして、

「そうだ。俺は子無舞久だ。そして、俺の中にいるのが神瀬川守だ」と告白した

「嘘…本当?」と空理が聞こえ「ああ、本当だ。」

と受け応え、「興味深いな」と夜音は手をワナワナ動かしながら言った。

「素直に答えてくれるとは思わなかったな〜」

「お前相手には隠せないと思ったんだ」と舞久は頭を掻きながら言った。

すると、『一つ聞いて欲しいことがあるんだけど、神軍から抜け出した人間がセミナリオにいて良いのか聞いて』と言われ舞久が

「もし神軍から抜け出した人間がセミナリオにいたらどうなる」その質問に社は少し間を開け「過去に例がないけど、大丈夫よ。ちゃんと保護してくれるから安心して」と社は俺じゃない人に語り掛けるように優しく答えた。

『よかった。なら安心だよ』そうか、守はこのことが心配で、ずっと、ばれないないようにしてくれと言っていたのか。

「ふあ～っ、なんか眠くなってきたな」欠伸しながら時計を見ると23時になっていた。「風呂に入るか」と言ったが「大浴場はもうとっくに閉まってる」と夜音が言った。

そうなると部屋に設備されているシャワー室を使うことになる。

「じゃあシャワー室で…」と舞久が言うと「でも、舞はどうするの、シャワーを浴びるとなると、その…」と空理が口籠もる。

空理が何を言いたいのかはよく分かる。多分、他の2人も分かっている。

俺が悩んでいると

社がとんでもないことを言い出した。

「皆で入ろうよ」と、

そして、一緒に入ることになったが俺だけは目隠しと口止めの魔法（拘束魔法）を掛けられた。

なぜ俺の耳にも拘束魔法を掛けないのかは知らないがおかげでいい気分だ。

『変態がいるよ！ここに変態がいるよ』ちょっお前、変態じゃないぞ、俺は理性という魔法を掛けている。円周率を数えてな。

円周率を数えているうちに俺の体は洗い終え、先に風呂から上がった。
円周率を覚えていて良かったと思いながら、ベッドに横たわり、そのまま眠ってしまった。

社　夜音　空理も風呂から上がり、寝る準備をした。

「もう舞は寝てしまったな」といいながら布団を掛ける。「女の子のこと教えてあげないとね」と空理が微笑みながら言った。
「まあ明日も頑張ろう！」と社が言い、眠りに落ちた

生徒会長との対面（前書き）

投稿が遅れました。

生徒会長との対面

翌朝、目が覚めると視界に社の満面の笑みが視界に入った。そして、社が「かわゆい顔して寝てたね～だから一緒に寝てもうた～」と抱きついてきた。「ちょっとおいやめろ！」と舞久が頬を赤く染めながら解こうとしたが社は離れない。
どうしたらいいか考えていたら、「舞、社ちゃん早く朝食食べに行こ！」と空理が少し怒りながら言って来たので素直に食べに行く準備をした。
どうやら、俺が起きるのが遅くて、社が起こしに来たが社が戻って来ないから空理が来たみたいだ。

その後制服に着替え、社達とエレベーターに乗り、最上階の食堂に行く。エレベーターは全面透明ガラスでできている。そのため、学校の風景が一望できる。俺と神東が戦った闘技場や青いドームの訓練場と最上階に行くにつれ、建物は小さくなる。一応説明しておくと最上階は５０階ある。相当高い。
風景を眺めているとずっと向こうに海が見えた。俺は疑問に思ったがエレベーターが最上階に着いたようだ。
エレベーターから降りると生徒達がちらほらいた。来るのが早かったようだ。

食券を注文する。社、空理、夜音はそれぞれサンドイッチを注文する。俺は和風定食だ。そして、カウンターで受け取り、６人テーブルに座る。
「なんで、３人共サンドイッチなんだ？」「今日はサンドイッチの日だからだ」と夜音が当たり前のように応える。
「周りを見てみろ、全員サンドイッチを食べてるだろ？」「えっ本当？」と周りを見たが誰もサンドイッチを食べていない。

「嘘だ」「てめえ…」
ちょっと信じちゃったじゃねえか…

「よう、座るぜ！」
「失礼、座らしてもらう」滝人と時彦が一緒に食べ始めた。
「あの…それは」
「ん…なんだよ？サンドイッチ食ってるだけだろ」
俺は滝人に、「……今日は何の日？」と聞いたら「サンドイッチの日だろ。当たり前だ」
滝人は平然と応えた。
マジか。こいつら…

「ところで、子無は後で一緒に来い。行くところがある」と時彦が朝カレーを食いながら言った。
「分かったよ。まあ何かしらのイベントは起こると思ってたからな」
「それでどこにいくの？」と社が聞き、それに対し「生徒会長室だ…」と時彦が俺を同情の眼差しで見る。社も「うわ～最悪だ」と言う。
いや予感しかしないな…

朝食を食べ終わり、俺と時彦は生徒会室に向かった。
生徒会室に向かう中、俺は少し警戒していた。もしかしたら昨日みたいに戦うことになると思ったからだ。だが、「安心しろ、生徒会長と戦闘になることはまずない、彼女はむやみに戦うことはしないからな」
と時彦は俺の気持ちを見透かしたように言う。
「そうか、良かったよ」
「そんなことより男言葉で話して良いのか、通りすがりに聞こえたらどうする？」「別に、臨機応変に対応するさ」「そうか……お、着いたな」

「これが生徒会室？」
それは、どこからどう見ても魔女の家の扉だ。取っ手には髑髏が着いていて、少しというかもの凄く不気味だ。
「さて、僕は教室に行く。後は生徒会長が案内するだろう…幸運を祈る」
「ちょっおま…行っちまった」時彦は移動魔法で一瞬で消えた。
「どんだけいやなんだよ、生徒会長嫌われすぎだろ」
だが、生徒会長には会わないといけない。まあ女性らしいからな、優しいだろ。
コンコン
「1年の子無舞です」
「どうぞ、入って」
お、女らしい優しい声だ。「分かりました。失礼します」高校の面接のように堅苦しい口調で受け答えする
生徒会室に入り、生徒会長の姿が視界に入るはず、だった。
ベチャッ
顔に物凄い勢いで何かが当たる。仄かに甘い匂いがする。これはパイだ。
よくお笑い番組でやってるあれ。
俺が放心状態になっていると前から「やった！顔面ジャストミートだ」と歓喜の声が聞こえる。
「なんで、こうなるの？」俺は立ち尽くし、無意識に呟いた。

生徒会長との対面（後書き）

生徒会長、登場

生徒会長との対面２

あれ？なんだろ…
無性に腹立つな、
「ほら！立ち止まってないで中に入って来て！」
「いや、あのパイのせいで前が見えないので何か拭うものないですか？」
「ほら！早く入って来て！」「あのだから拭うものを…」「早く入って来て！」俺のフラストレーションは頂点に達した。
「前が見えねえから、入れねえんだよ！！ボケが！」俺は前にいるであろう女に蹴りを放った。だが人間を蹴った感触がなかった、そのかわり　カチッ　何かのスイッチを蹴ってしまった。それと同時に　ザバア～
天井から大量の水が降ってきた。
「キャハハハハハ、爆笑！面白すぎ！」
萎えた…テンションが地底まで打だ下がりだ。俺、明日から地底人として暮らすと言われた時のテンションの低さだ。言われたことないけど。

水のおかげでパイが流れ落ちる。視界が開け、目の前を確認するとそこには、髪の色が紺色の癖毛、到底生徒会長には見えない佇まいだが服装が特殊すぎる。
「メイド服だと…しかも完璧な絶対領域だ」
確かに生徒会長のスタイルはかなりの物だ。締まるところは締まり出るところは出ている。そして、絶対領域（ガーターからスカートの間）はもしオタクが見たら、崇めるぐらいのレベルだ。
「フフ、君が噂の融合体だね！リアクションが面白すぎ！これは有望な人材だわ」「あの…融合体って言うのはちょっと…」「ん、そうね、今は子無舞ちゃんだもんね！」と会長との初会話を果たす、

なんで皆生徒室を避けるのか分かった気がする。
「あっそうだ！自己紹介がまだだった、私の名前は代々神照（よよがみてる）、能力値はＡＣＥ、そして生徒会会長です」
いつも思うが苗字に神が着いてたら凄いカッコいい感じになるな。かといって子無とか！なんだよ、どうやったらこんな苗字が生まれんだよ！
「ハックチュン　あ～寒い　代々神会長、着替えとかないですか？」暦では夏の季節であり、当然部屋にはクーラーがついている。水びたしになった（代々神会長のせい）舞久にとって悪環境でしかない。
「可愛いくしゃみするね、ますます男のあなたを見てみたくなったわ…はい着替えよ！」舞久は着替えを受け取るがあからさまに嫌な顔をする。「あの…これメイド服じゃないですか？制服の着替えは…」「この部屋にはメイド服しかないよ」「ですよね～ってメイド服しかないんですか？」
すると、照は怪訝に笑い
「ごめんね！制服の着替えはないのよ」とわざと芝居がかった風に言った。
「もしかしてあなた、俺にメイド服を着させるために」「ち、違うよ！違うからね！」嘘が下手すぎる。動揺しすぎだし…まあそこが彼女の良いところだろう。「分かりました。着させていただきます」
「やった～！」舞久は照の歓喜の声を背に浴びながら、試着室に入った。

５分後　メイド服に着替え終わる。鏡の前に立ってみると、小悪魔的な黒のフリフリが特徴のメイド服を着た少女が立っている。
「かわいいな…」
鏡に映った顔が笑っている。頬を少し赤らめて
「着替えた？早く出てきてよ！」「はい、ただいま」舞久はカーテンを開けた。「お～わ～、可愛いよ！よく似合ってるわ！やはり有

望な人材だわ！」「あ～そうだな、よく似合っている。」「そうですか…えっ
なんで神野先生が？」
舞久は少し戸惑い、急に赤面した。
「ははっまあそう恥ずかしがるな、まあ私がここに来たのはお前達と一緒に指令部に行くためだ」
神野がそう言うと、扉を開いた。
「何をしに行くんですか？」舞久の質問に神野が
「お前の中にいる女と会話しに行く」

「え？

謎の妹

学校の地下に臨時通信指令部がある。通常、本元の通信指令部であらゆる指示が出される。いわば、国会のようなものだ。もし通信指令部が倒壊してしまうとセミナリオは消え去る。そのため、学校の地下に臨時通信指令部を設けた。
臨時通信指令部には本元の通信指令部よりは設備が整っていないが旧研究室が存在する。現在は新しい研究室ができているため旧研究室は誰にも使われていない。そして今舞久、照、神野は旧研究室にいる。

「そこに座ってくれ」
神野の指示で舞久は赤い椅子に座る。「今から、お前の精神を体から乖離させる。このヘルメットをかぶってくれ」舞久はヘルメットをかぶり、目をつぶる。
神野がキーボードを叩く音が聞こえる。しだいに耳鳴りが聞こえだし脳の中に《乖離します》と響き、次の瞬間に俺の精神は途絶した
《乖離成功、身体的障害なし、システム制御に移行》投影ディスプレイに様々な波計が出現する。
《ＡＮＯＴＨＥＲ》という文字が現れる。

神野がマイクに向かって
「聞こえるか？子無舞の体の持ち主」『はい、聞こえます』「まず君の名前は？」「神瀬川守です、１６歳です」「では守、君は神軍に招集されたが戻ってきた、それで間違いないな？」「はい」「どうやって戻ってきたんだ？」神野が少し身を乗り出して聞く。
「神軍に招集される前に臨時に収容される施設があります。私はそこに収容されました」「招集先の神の名は分かるか？」「たしかアルデウスだったかな」「比較的温厚な神だな…続けてくれ」「はい、

そして収容所に入り、ずっと待っていました。その間周りにいる人が悲鳴を上げながら、泣いていました。次第に時間感覚がなくなり出した頃、収容所が慌しくなったので息を殺して聞くと、
「神の言がないのに、能力を維持したやつが現れた。名は子無舞久だと言っていた」私は迷うことなく、帰世権を使い、こちらの世界に来ました」「ふん、驚いたな。お前が収容された施設は精神を砕き、逃げる意欲を失わせる心理魔法が掛けられている。その中でよく戻って来たな」「そ、そんな…」守が謙遜すると照が守に「私達も元に戻れるよう協力するわ」と言う。「はい、ありがとうございます…あと舞久に聞いて欲しいことがあるんです」
「なんだ？」神野が聞く。「――――――――――――と聞いといてくれませんか。私は怖くて聞けないんです。お願いします」神野は少し戸惑うが「分かった。聞いておく…さて、もう遮断するがいいか」「はい、ありがとうございました」そして、守との会話が遮断され、同時に「つう～頭が痛い」と舞久の声がした。
「子無、頭の痛みが引いたら職員室に来い」
そう言って神野は研究室を後にする。
照もそれに付いていき「じゃあね」と手を振り、出ていった。

頭の痛みが治まり、職員室に向かう。「失礼します」と言い職員室に入り、神野の席に向かう。
神野は舞久に向き直り、
「お前に妹はいるか？」と聞いてきた。「いや、妹はいないですけど」「本当か？嘘じゃないな？」「本当ですよ」「そうか、ならいい」と言いながら、着替えの制服を受け取る。「早く生徒会室に行って着替えて来い」舞久は安堵し、
「ありがとうございます！」と言って職員室から出ていった。

「嘘はついていないな」
先ほど、守に舞久に聞いて欲しいことがあると頼まれていた。それ

は「舞久に妹がいるか聞いて欲しい」とのことだった。が、舞久は否定した。「もしかしたら…」と神野の脳に最悪の状況が過るが、すぐに消去し、「まあなるようになるだろうな」と神野は呟いた。

――――――――

舞久が生徒会長室に向かっている。移動魔法で瞬間的な速度を出しながら。

そして、案の定すぐに生徒会長室に着いた。

ドアをノックして、中に入ると生徒会室に入ると

ベチャッ

また、パイが舞久の顔を直撃する。

「だから、なんでこーなるの？」舞久のテンションが極限まで低下した。

生徒会書記（前書き）

補講はきつい

生徒会書記

訓練場とは生徒達が自ら特訓するために設けられた場である。あらゆるシミュレーションで演習ができるシステムがあり、能力向上にはもってこいの場である。そして、現在訓練場に2人の少女が修業している。

――――――――――

魔法によってあらゆる壁が無惨に壊れている。訓練場内では一定時間に修復魔法が発動しているがそれも間に合わない状況だ。

「違う！もっと滑らかに魔法陣を形成させなきゃ！」「無理だ、どうしても遅れちまう」今は舞久が社との契約より特訓してもらっている。舞久はすぐに基礎魔法を完璧にこなせるようになり、応用に取り掛かっていた。属性連陣魔法はその名のとおり、あらゆる属性の魔法陣を形成し、連続的に攻撃する応用技術を要する魔法だ。だが形成に失敗すれば、最悪の事態をまねく。単純に見えて、リスクの高い魔法である。

「やっぱり俺は重複魔法がやりやすい」と言って舞久は前に手を出し、魔法陣を形成する。だが魔法陣は1枚しかない。だが舞久が手を開くと次の瞬間魔法陣が同じ焦点軸を5枚に魔法陣がスライドしていき、魔光線が放たれた。

「そうね、重複はできてるみたいだし、これでおしまいにしよっか、舞」「そうだな、社」そして、訓練場を後にする。ちなみにさっきの重複魔法の仕組みは5枚の魔法陣に威力、速度をを上げることのできる魔法陣を出し、それに通過させるように魔光線を放つ。属性連陣魔法とは少し違った仕組みだ。

今は夜の9時、大浴場はまだ開いている。

「私は大浴場に行くけど舞はどうする？」「俺は部屋のシャワーで浴びるから」「そう、まあまだ入ってる子もいるし、もし私と2人きりで入るとしたらどうしてた？」「シャワー」と舞久が即答する。社は少し拗ねながら大浴場に向かった。舞久も自室に向かうがふと思い出す。
「部屋の鍵訓練場に忘れてきたかも」と言って舞久は踵を返し、訓練場に向かう。

訓練場に入ると1人の生徒がいた。だがその生徒は神々しい雰囲気を纏い、異次元の存在に思える。
「誰や？」と関西弁を介して水色の髪を揺らしながら、こちらを振り返り質問してきた。
「子無舞ですが何か？」と応えると手をポンと叩き「お～君が子無ゆう子か。たしかにメイド服が似合いそうな風貌しとるな」メイド服という単語で舞久はある意地悪な女性の顔が浮かぶ。
「私は神都愛有（こうづあゆ）や、ランクはＡＣＥ、生徒会書記担当しとる」
愛有は自己紹介する。
舞久は愛有を一瞥し、「なんで着物何ですか？」と聞いた。さっき神々しく見えたのはこの着物のおかげだ
「着物が好きやからや！」「はあ、そうですか」
あまりにも単純な応えに舞久はたじろいだ。
がそこで当初の目的を思い出した。
「あの…ホテルの部屋の鍵落ちてませんでしたか」
舞久は愛有に聞き「これやろ」と鍵を舞久に見せた。だが舞久に渡そうとはしない。愛有は策士的に笑い
「私に勝ったら、渡したるわ」
愛有は右手に一瞬で武器を出した。弓矢だった。
「さあ、返して欲しいんやったら私に勝ち～」
愛有は完全に戦闘態勢に入る。舞久も日本刀を出し

「無理ゲーだろ、これ」
とは言いながら、舞久は先制攻撃を仕掛けた。
重複魔法を愛有に放つ。
だが一瞬で粉砕されるがその一瞬で移動魔法により愛有に斬り掛かる。遠距離の愛有に近距離は分が悪い。と舞久は判断していたが
「那須与一は扇の的をうちつけた。それは殺那的な行動、そして、最初は射たれたことも気付かない」
愛有が関西弁なしで語る。そして、舞久の胸に指を差し、「だから射たれたことも気付かんやろ」
舞久の胸には一本の赤い矢が突き刺さっていた。

生徒会書記２

「なっいつの間に?!」
「最初から…」愛有の言葉に舞久は驚愕の表情を浮かべる。「とかゆう思ったか」「ん…どっちなんだよ?」愛有の言葉に舞久は少しうんざりする。すると、愛有は唇に指を当てながら、「どっちやと思う?最初かそれとも最中か?」愛有は舞久の応えを待つ。

もし最初からならまだ納得はできる。それができるほどの技術があるということで片付けられるからだ。だが戦闘の最中となると別だ。俺は重複魔法で迎撃し少しの隙に斬りつけた。この間に攻撃をする隙は微塵もない。となると、あれしかない。

舞久は胸に刺さっている矢に触れる。すると矢は無惨し消え去る。
「この矢は幻覚だ」
「うん、正解や、まあ幻覚を掛けたんは君が斬り掛かってきた時やけど…」
愛有は閑かに微笑み、
「今も君は幻覚を見てるんやで」「えっ?」
突如、舞久と愛有の体感距離が遠ざかる。さっきまでは１メートルぐらい間が空いていたが２０メートルぐらいまでに空いていた。
「幻覚魔法は相手に一寸の余地も与えたらあかん。怒濤のように仕掛けへんかったら相手の意識が追いつきおって幻覚魔法の効力が落ちてしまうんや。ホンマ難儀な魔法やで」と愛有はため息をつく。
確かに幻覚魔法は高度な技術が必要になってくる。それはどれだけ速く魔法を発動させられるかだ。
「生徒会に入るには、いくつか条件がある」と愛有は唐突に話し始める。
「まずは、応用魔法が使えること、と言っても第五応用魔法までだ

がな…次に必ず5つ以上の属性魔法が使えること、最後に詠唱魔法が使えることだ…そして、君には移動魔法の応用魔法を見せてやろう」とまた関西弁なしで話す。この人本当に関西人か？設定なんじゃね。と舞久が思っていると、愛有が視界から消える。舞久は刀を強く握り、警戒する。すると愛有が姿を現す。だが、愛有の姿がどんどん増えていく。影分身、今の現象に当てはまる言葉だ。
どんどん増大して数が１００人ぐらいになった時、愛有は矢を射る。およそ１００人が射た矢が舞久に放たれる。何も出来ない。防ぐことも、避けることも、叫ぶことも驚くこともできなかった。死んだ。と思った。
だが、舞久に矢があと数ミリで当たる寸前ですべての矢が霧散する。舞久はショックのあまりひざまづいた。
「びっくりしたんか？悪かったな」と舞久に近づいて来た。魔法はすでに解けている。
「うっ、ぐすっ」「ええっ？！泣いてるんか？」
俺何泣いてんだ。こんなんで泣くなんてまるで女みたいじゃ、って俺いま女だ。「ああ～悪かった。少しからかった、じゃなくてやな…」と愛有は困っていたが妙案を思いついた。「そうや！、修業なんや。恐怖があれば戦いにはならんからな」愛有は部屋のキーを舞久に渡した。「じゃあ！もう帰るわ。おおきに！」と言って訓練場から出ていった。訓練場に舞久だけが残った。
次第に涙が引いて立ち上がる。扉に向かいながら、「負けてらんねえ！」舞久はそう呟いた。

――――――――――

生徒会室

そこに生徒会会長：代々神照と舞久達のクラスの担任神野麗がいた。
２人はある一枚の紙を見ていた。
そこには、舞久によく似たあどけない女の子の顔写真がある。

「この子がそうなんですか？」「ああ、そうだ。この子が…子無の妹だ」

不安と不安と不安

セミナリオに入学して数週間が経った。少し前までは普通に暮らしていたがあれよあれよと変哲な生活になった。昔はマンガやゲームみたいな世界に入りたいと切に思っていたが精神年齢が上昇すると、三次元が二次元に介入できないとすっぱり諦めた。だが今は魔法やら神やらと特筆すべき出来事が起きた。
そして現在、大学受験生のようなモチベーションで頑張っていたら遂にあの日が迫っていた。あの日とはあれをあれしてあれする日だ。

――――――――

早朝
この頃、夜に特訓をしているから起きるのが億劫だ。だが、起きなければいけない理由がある。主に俺の体のために。

「舞！早く起きなさい朝御飯食べられないよ！」
空理がどこぞの母親のように舞久を起こす。
「まだ眠いから先に行っといて」「前もそういって遅刻したんでしょ！」
空理が布団を奪い、なんと鞭を出した。
「起きなかったら、思いっきり叩くよ、てへっ」
「ああ～今日もいい天気だ、本当に！」「カーテン閉まってるよ」
空理がジト目で睨みつける。
「歯磨きしてくる、待っといて」「うん、分かった。早くね」
空理のキャラってあんなんだっけ、もっと遠慮がちな感じだったはず…
朝食を食べ、そのまま教室に向かった。そのあと舞久はクラスの女子と談話し、鐘がなり着席する。

神野担任が豪勢に扉を開け教壇に上り、黒板に何か書き始めた。書き終えると前を向いた。
「今週末から林間学校が実施される」確かに黒板には綺麗な字体で林間学校と書かれている。
「林間学校では他クラスと合同で勉学に励むと建前ではそうなっている。林間学校ではある大会がおこなわれる。それが林間学校でメインとなるイベントだ。そしてその大会はグループを組み、指定されたエリア内で聖杯を探すという極簡単なルールだ」つまり、林間学校で聖杯戦争をするということだ。
すると、夜音が
「聖杯戦争か、響きがいい」と目を輝かせながら言った。どうやら、夜音も俺と同じことを考えていたようだ。
「で、いまからグループを決めてもらう。ただし、林間学校の斑じゃないからな、それは当日に発表する。今は大会グループを決めろ！人数は４、５人だ」一斉にクラス全員が立ち上がりグループを決め始める。舞久はすぐにグループを決めた。グループは舞久　社　夜音空理　滝人だ。
「あと言い忘れたがクラス代表は大会には参加しない。クラス代表はゴールで待つというシステムだ。まあクラス代表にもいくつか許可されていることがあるがまあそれは大会直前に言われるだろう」神野が説明してる間に全員グループを決めおわっていた。
「グループは決まったな！それではそのグループで大会に挑むことになる。健闘を」と言って神野は教室を後にした。
放課後、部活に行く者もいればホテルに行く者もいる。そして、舞久達は食堂にいた。
「林間学校の聖杯戦争ってどこで開催されんの？」
舞久にはそこが最大の疑問だ。「長野県だよ、あと聖杯戦争は北アルプスの山脈で開催されるんだよ」社が応えるが「山を登るのは苦

手だよ～、それも今は夏で北アルプスだよ、絶対しんどいよ」と愚痴を吐く。
滝人も「聖杯探す以前の問題だな」と言う。
作戦考えようと言って集まったはいいがただ愚痴をこぼしているだけだ。
「ふふん、お前達、何か忘れてはいないか？」と夜音が立ち上がり発言する。
「お前達、いや愚民ども」「言い換えんなよ」と舞久が突っこむ。
「我の故郷がどこにあるか覚えているか？」「黙れ、厨二病」とまた舞久が突っこむ。「覚えていないなら教えてやる。我の故郷は長野の北アルプス付近なのだ。クハハハハ」と高笑いする。そして全員が「「「「マジで」」」」と声が重なった。「マ・ジ・でだ！だから私は北アルプスの他南アルプスも中央アルプスも熟知している」本当みたいだ、いつも馬鹿みたいなコスプレしているこいつが山登りしていたとは金田一とコナンがタッグを組んでも迷宮入りしそうだ。
「良かった。山登り経験者で北アルプス付近に住んでたなんて夜音すごいよ！」「これが私の力だ！」
空理と夜音がはしゃいでいる。これで他のグループよりは有利に立てたはずだ。「じゃあ！作戦は山を登るってことで！」と社が締めくくりブリーフィングは終わった。「絶対優勝するぞー」と社　夜音　空理が叫ぶ。すると滝人が「なあ、舞久」と男の俺の名前を呼び「何も解決してなくね？」と3人を見ながら言った。

そして、ついに
林間学校が幕を開ける。

大会前日（前書き）

今回はちと長いです

大会前日

京都駅からバスで長野まで向かう。その間バスの中ではほとんどの生徒が寝ていた。そして、出発して3時間後旅館に着いた。
今回林間学校に参加するのは1年だけだが人数はそれなりにいる。バスから荷物を下ろし、旅館に入る。
旅館のエントランスに部屋割りを記すボードがあり、それを見てどんどん中に生徒が入って行く。旅館の風体は極普通だが檜木の香りが漂っている。生徒達が荷物を部屋に入れる中に白髪の少女が先生におんぶされながら、部屋に向かっていた。

「すいません。バス酔いしてしまって」「仕方ないからね、バス酔いは」
舞久が謝るのはもうこれで6回だ。そして、舞久に謝られてる先生は4組の吉神氏弥生先生だ。
「子無さんと同じ部屋の人は？」「もう荷物を持っていってもらってます」
舞久は吐き気を押さえながら応える。
「それにしても、子無さんていろんな人に注目されてるのって知ってる？」
「えっとどんな風に？」
注目のされかたによっては暴動を起こさねばならないからな。
「前に闘技場で神東君と戦ってた時にあなた、血だらけになっても戦い続けたでしょ。あの時に多くの生徒と先生達、まあ私もだけど感動したと思う。女の子でしかも入学してたった1日、普通なら逃げるわ。だって、つい先日まで戦いとは無縁の生活をしていたからね。まあ、あの戦いの後にあなたの話題が飛び交ってたわ、クラスに押し掛けたりしてたわ、主に男子がね」やっぱりかと舞久は思う。
舞久が食堂に行く時も合同授業の時も妙に注目されていた。それは

自分の髪が白だから珍しいからと思って片付けていたが。
「まあ、あなた女子にも人気があるからね…男っぽいところがあるからかしら」「はあ、そうですか…あっここの部屋です」
吉神氏は舞久を下ろし
「じゃあ明日頑張ってね、期待してるわ」と言って去って行った。
舞久は部屋に入る。すると部屋の中には社　空理　夜音がいた。
「大丈夫？しんどいでしょ、布団用意したから、寝たら」「ありがとう、空理お言葉に甘えるよ」
舞久は布団に入る。
ああ、少しましになった。と思ったら社が布団に入ってきた。
「私も一緒に寝とくよ」
「はあ、別にいいけど…」いつもなら、社をここで袋叩きにしているが舞久にはもう力がなかった。
「もうすぐしたら、授業があるけどこれじゃ出れないね」「先生には私が伝えておく…舞それで…ってもう寝たのか？」と夜音が少し呆れながら言った。
「そうだね、かわいい寝顔だよ、ますます男の舞を見たいなあ」「どんな人なんだろうね？」と空理が言い「アニメを見ているのなら大歓迎だ」3人は舞久の容姿を想像する。
だがもう授業が始まる時間が迫っている。
「じゃあそろそろ、行こっか」と社が言い、3人は部屋を後にした。

――――――――

林間学校の合同授業は、授業という名目だがほとんど明日の大会の調整である。だがやはり大会は競争であり敵視するのは当然だ。
だから、今のこの場のムードは、殺伐としていて、かつ険悪さが漂っていた。
その中に社　空理　夜音　滝人そして、時彦がいた。
「それで子無は部屋で寝てるのか、バス酔いするなら酔い薬を持ってくればいいんだがな」時彦が言い滝人がそれに応える。「まあ、

あれだ遠足でわくわくしてて酔い薬忘れちゃった、てへっみたいな感じだ」「遠足での忘れ物が酔い薬はないだろう、あとさっきの気持ち悪いからな」「俺もやめときゃよかったって思った」と軽く談笑している。すると、隣に一人の少女がやってきた。

「あらあら、調整は終わりましたの？」「ああ、もう終わったている。滝人だけだがな…で何のようだ？和神百（わがみもも）」和神百、ＡＣＥクラスで４組代表、縦ロールに整えられた黄土色の髪をしており、おっとりとした雰囲気をしている。「暇潰しよ、あと子無さんに会いに来たんだけど…いないみたいね」「あいつならバス酔いで具合が悪くてな、部屋で寝てるぜ」「そういうことだ」「ふうん、案外かわいいところもあるのね、彼女」百がうなずきながら言う。「でも彼女に会えなかったのは残念だったわ」百は誰が見ても分かるように肩を落とす。だがすぐに交戦的な目をして

「まあ、明日はお互い頑張りましょう。果たして私のクラスの有力候補の花神と医神に勝てるかしら」「舐めるなよ、聖杯を手にするのは僕のクラスだ」

しばらく火花を散らしていたが百が「それでは、ごきげんよう」と去って行った。

そして、合同授業が終わり夕食の時間が訪れる。

舞久も回復し、夕食を食べる。そして、部屋へ戻り、風呂に入る準備をする。

さて、ここまで順調に事は進んだ。だが風呂というイベントは舞久にとって死を意味する。そのため舞久は皆が入り終えた後に風呂に入ることに決めた。

「ふう、もう誰もいないし良かった」舞久はそうつぶらきながら浴場に入る。

猿が山から降りて湯に入ってんじゃねえのかみたいな光景が広がっている。

「ふういい湯だ」「ああ、そうだな」あれっ？何か聞こえたな、幽霊かな？幽霊だったら無視してやる。
「おい、無視するんじゃない」煙の向こうから声が聞こえる。これで俗世と別れるのかと思っていたら
「えっ神野先生？！」
煙が晴れると神野がいた。神野は舞久のところまで寄って来た。
「お前、難儀だな、精神が男だといろいろ気をつかうだろう」「そうですね、早く元に戻りたいです」舞久がそう言うと「欲情するんじゃないぞ。お前の周りには結構女があつまるからな」と神野がニヤニヤしながら言う。「起こさないですよ。俺だって一般常識はあります」すると神野が迷いながらも「少し気になるんだがお前、親はどうしてるんだ？」と聞いてきた。「両親は交通事故で死にました」「そうか…」「でも！」と舞久は立ち上がり「俺は両親に教えてもらったことを守る。それが俺にできる最高の親孝行だと思っています」「ふん、お前も頑張ってるんだな」「うっ」舞久は少したちろぐ。神野の笑顔が母親の笑顔に重なったからだ。優しさだけに包まれた笑顔が。
「まあ、明日は頑張るように、幸運を祈る」と言うと神野は浴場を後にした。
浴場には舞久と湯気だけが凡庸に佇んでいた。

風呂から上がり、マッサージ機で和む。そして、部屋に戻った。
空理は寝ていて、夜音と社はバラエティー番組を見ていた。社が俺に気付くと布団に入る。夜音もテレビを消して布団に入る。
俺も布団に入り、電気を消す。すると社が「明日は頑張ろうね」と言ってきた。俺は社がどんな表情で言ってるのかは暗くて分からないが笑って言ってるのは声音で分かる。
だから俺も
「当たり前だ」
と笑いながら言ってみせた

俺達の戦いはこれからだ！

聖杯合戦

ルールは至極簡単、各グループが北アルプスに入り、どこかにある聖杯を探しだすというもの。所要時間は１２時間、だが制限がいくつかある。まずは移動魔法を使わないこと、つまり体動速度を上昇させて山を登ることを禁止とする。
次に各グループとの協力的交戦的行動を禁止とする。最後に携帯電話等の持ち込みも禁止する。

クラス代表は主にゴール地点でグループの到着を待つことが義務だがクラス代表にはアドバイザーという権利をもちあわせている。各クラスグループから相談された場合助言することを許可する。そして参戦権という制限時間内だけ聖杯合戦に参加できる。

各グループには聖杯の異なったヒントが与えられる。ヒントは開始されてから2時間後に配布された通信機に通信される。

聖杯合戦は北アルプスを自力で登りながら、他のグループと連絡を絶ちヒントとクラス代表の助言にすがりつきながら聖杯を探すという大会である。

――――――――――

聖杯合戦　開始5分前
舞久達は通信機をもらい、聖杯合戦の説明を聞き終わり、最後準備をしていた。
「酸素ボンベと非常食とまあちらほら、これで準備万端だ」夜音がバックを背負って言う。「酸素ボンベっているの？」空理が首を傾げながら言い「高山病対策だ。２５００メートルから酸素濃度が減

り、頭に酸素が行き渡らなくなる。それで頭痛　吐き気　を催し、立てなくなる。それに合併症も引き起こすからな、酸素ボンベは必要不可欠だ」「そうか、高山病を忘れてたぜ」滝人が屈伸しながら、言った。確かに北アルプスのような高山では、高山病を引き起こし、死亡した例もそう少なくない。
「私がいれば山で遭難することもない。安心しろ」と夜音が自信に満ちあふれながら言う。「それ、遭難フラグ立ったんだが」と舞久が言う。

〈開始まで後1分です〉

「いよいよか、そうだ！円陣組まねえか？」滝人が提案し「いいね！やろ！」と社が承諾する。
社　空理　夜音　滝人　舞久が肩を組み円陣を組む。
「必ず聖杯を手に入れるぜ！俺達の戦いはこれからだ！」と滝人が叫び、
「「「「「「オーッ！」」」」」」と掛け声を上げた。

〈開始まで10秒前〉
「ああ、緊張する」
〈9〉
「わくわくしてきたよ～」〈8〉
「お前はどこの戦闘民族だ」
〈7〉
「まあ、気楽にやればいいんだよ」
〈6〉
「そうだな、気楽に行こうぜ」
〈5〉　〈4〉　〈3〉　〈2〉
〈1〉

〈開始！〉

生徒達は一斉に山を登り始める。

遂に聖杯合戦が幕を開けた

ヒントの内容

聖杯合戦が遂に始まった。各々のグループが山を登るその光景をクラス代表陣が高級そうな椅子に座りながら大型ディスプレイで視聴している。

「良かったよ、クラス代表になっておいてこんな時期に北アルプスを登っていたら干からびてしまう」
時彦が椅子にもたれかかりながらだるそうな目でディスプレイを睨む。
「あら、あなたそんなにサボり魔だったかしら」
百が時彦とは対称的に礼儀正しく座っている。
特に興味のない時彦は飲み物を取りに行こうとした時、ディスプレイに舞久達が写った。どこから撮っているのかは分からないが舞久達は比較的遅く登っていた「あら、頑張ってるわね、そういえば、九神さんは北アルプス付近出身でしょ
有利に立ててるじゃない」と他人事のように百が言う「九神もそうだが、一人忘れてはいけない奴がいるがな」「あら、誰かしら？」
ディスプレイに目を向けて百が訊いてくる。
「神民滝人、奴の体力は無尽蔵並だ、北アルプスごときでばてないさ」
時彦は不敵に笑いながら、言った。

――――――――――

北アルプス　２５００メートル地点（出発地点は１５００メートル）
　背の高い木々がほとんど生えていない。そこの少し開けた場所で舞久は休憩していた。
「けっこう登ってきたんじゃない…」「そうだな…休憩せずにぶっ

通しで登ってきたからな」社と時彦はあまり疲れた顔をせずに話している。よくそんなさわやかフェイスで話せるものだ。普通なら息が切れて話すこともできないのに
ほら、こんな風に
「はう〜、疲…はあ…はあ…ちゅかれた〜」と息切れすぎて何言ってんのか分からなくなってる。ちなみにこれは空理だ。夜音は山登り経験者だけあってそんなに疲れている様子はない。俺は登ってる途中でばてそうになったがジュース奢るという契約で滝人に負んぶしてもらった。滝人はあり得ない体力の持ち主である
２０分ぐらい休憩していた。少し休憩しすぎじゃないかと思っていたがその答えは滝人が発言してくれた。
「たしかヒントがあったろ、出発して2時間後に来る奴だな、もしヒントが一回山を降りろとかだったら元も子もないからな、それに2時間までもう残り少ないここは待つことにしようぜ、ヒント」と滝人が意外に計算していたことにこの場の全員が驚いた。いつもはおちゃらけているくせにと同時に皆が思った。
「お前ら、失礼なこと考えてるだろ？」滝人が女子陣を睨む。「まあまあ、こんなに美少女に囲まれてるんだからさ」と社がウィンクしながら言う。「悪い気はしないけどよお」と滝人は頭を掻く。すると「おい！」舞久が立ち上がり、険悪な表情を浮かべる。社は美少女と言ったことに怒ったのかと思っていた。
「俺もハーレム味わいたかった！くそ！」「えっ？そっち！」舞久は膝から崩れ落ち、「こんな思いを抱かせた神を俺は許さない」舞久は土を殴っていた。
舞久以外の全員が若干引いていた時
〈ヒントを伝えます、ヒントを伝えます〉
通信機から声が漏れる。
全員息を殺して聞き入る。〈聖杯のヒントを与えます〉と間を開ける。そして
〈ヒントは富士山の次に高い山です〉と告げた。

沈黙が続いた。
だが夜音が言葉を放つ
「富士山の次に高いのは北アルプスの北岳だ。北岳は３０００メートルある山だがほぼ岩肌だ。北岳からは晴れていれば富士山も見えるんだ」「北岳はどっちにあるんだ？」すると夜音は道を歩く。だがとぼとぼと今にも泣きそうな顔をしながら「分からない。てへっ！」「何がてへっだ！騙されねえぞ！」「だよね～～……ごめんなさい」夜音は素直に謝る。
希望が断たれたかと思ったが登山道の道分かれに看板があった。全員一斉に駆け寄り看板を凝視する。
そこには、
〔北岳まで残り１時間〕
「「「「「よっしゃ～～～！！」」」」」なんと登っていた道が北岳に通じていた。すごい偶然だ。
「よしじゃあ北岳に行くぜ！」
全員が歩き始める。北岳にいったい何があるのかは分からないがこのメンバーだったら大丈夫だろうと舞久は思った。

黄金の魔法陣（前書き）

感想お願いします。

黄金の魔法陣

開始してから４時間、
舞久達は北岳山頂に到着する。山頂には一般の登山者もおり、北岳と書かれたプレートがあった。

「北岳到着～　おお、景色が綺麗だよ！ヤバいよ！」社が子供のようにはしゃいでいる。まあ、はしゃぐのも無理はない。青空が広がってて眼前には雲海がある。非行者がこの風景を見たら2秒で心変わりするレベルだ。
「あっ富士山だ！富士山！カメラある？！」「あるわけねえだろ」
舞久が空理に応えると「いや、持ってるぞ」夜音がバックからカメラを取り、空理に渡す。
空理がカメラで富士山を撮っている間、北岳山頂を探ってみたがヒントらしきものはない。
「ヒントってなんだったんだ？」舞久が考えていると空理が撮った写真を見ていた。すると、ある事に気が付いたらしい。
「富士山が写ってない…なんで、あそこにあるのに」その言葉に全員食い付く。たしかに富士山は写っていない。なぜ写っていないのか全員が考えていた。
だが答えが見つからない。もうコナンに聞くしかないかなと半ば諦めていた時
舞久は生徒会書記の神都愛有を思い出した。
「単純に幻覚とかだろ」
「幻覚か、解いてみる？」と社が幻覚魔法を解き始める。
魔法を解除するのには種類がある。１つは増設方法、あらゆる魔法を付け足すことができる。２つは減装方法、魔法を減らし、能力を下げる。最後に解除、これは言葉の通り魔法を解除することだ。

「解けたよ～、それにしても舞よく分かったね」と言って社は舞久に抱きつく。「抱きつくな、邪魔だ」
男の俺だったら抱き締めているがこの状態じゃ意味がない。「ふ～ん、そんなこと言うの？ご褒美になにかあげようと思ったのに」
「ありがたき幸せ！社様！いえ姫！」舞姫は一瞬で心変わりした。
「オーッホホホ、舞あなたは私の奴隷よ、跪きなさい」舞久は跪く。
その光景をみながら滝人は通信機で時彦に連絡する富士山の幻覚は解いたがなにも起こらない。もう手段はなかった。

すぐに繋がり
〈お前ら、何をやってるんだ、子無と鳴神の茶番を止めろ！〉滝人は時彦に言われて舞久達を見ると雲海に魔法を放っていた。
「マジか、こいつら」
滝人は石を2人に投げて、茶番を止めた。

――――――――――――

クラス代表陣
ディスプレイには舞久が社に跪く映像が流れている。全員が唖然とディスプレイを見ていた。

「ふふっ子無さんて面白い人ね」と百が微笑む。
時彦はディスプレイを見ないで知らない振りをしている。ディスプレイでは舞久達が唐突に雲海に向けて魔法を放ち始めた。すると、ブー　ブーと通信機が唸り始める。時彦は素早くそれに応答する。
「お前ら、何をやってるんだ、子無と鳴神の茶番を止めろ！」ディスプレイには滝人に石を投げ、茶番は幕を閉じた。

「で、何なんだ？」その問に滝人は事の顛末を話した。「幻覚か、でこれからどうするか分からないか、子無に代わってくれ」と時彦が言い、「はい、子無ですが」「お前はきずいていたのか、雲海も

幻覚ということに」その問に舞久は「えっそうなの…いや、分かってたけど、何か？」時彦は「お前、遊んでたのか、雲海で」「え～遊んでるように見えた？違うからね、遊んでないからな」時彦は頭を押さえ、ため息をつく。「まあいい。つまり富士山の幻覚はフェイクだ、雲海の幻覚を隠すために作られたものだ。ミスディレクションの役割を果たしていたそしてお前らは雲海を消していた。まあ、その程度の幻覚ということだが、もう雲海は晴れているはずだ、だから雲海があった場所を見てみろ…ふん、健闘を祈ってるぞ」と言って通信を切る。

――――――――――

北岳山頂

時彦からの助言により

全員雲海があった山々を見る。すると、黄色の何かが認識できた。

夜音はバックから望遠鏡を出し、眺める。

「あれは！すごいぞ！」

と夜音が望遠鏡を舞久に渡した。舞久は望遠鏡で黄色の何かを見る。

その正体は無限に張り巡らされた魔法陣の塊だった

悪魔、降臨

「あの中に聖杯があるんじゃね？」舞久が言うと「まあ、あるかどうかは分からないけど、怪しいからね、行ってみよう～」社が応える。だがあそこまで行くに最低でも2時間は掛かる。もし、向かっている間に他のグループが到着していたら後の祭りだ。それを考慮に入れてか、空理が

「地形を変えれば、すぐに着くけど」ととんでもないことを提案する。全員空理の思惑が分からない。もし無闇に地形を変えれば、どうなるかは予想が着く。

「山頂には誰もいないよね」一般の人がいないのを確認してから

「ライ　オブ　ザ　ランド」魔法名を口ずさむ。

すると、魔法陣が空理の下に形成される。魔法の色は茶色だった。

「その魔法陣なんで色が違うんだ？」舞久の率直な疑問に空理は当たり前のように応える。

「魔法陣は形成される環境状態によって色が異なるの、そしてこれは環境が山だから茶色なの」また1つ賢くなったと舞久は思った。

「じゃあ、行こ」空理の言葉に歩き出す。端から見たら、斜面を歩こうとしているように見える。

だが、空理が歩くところは全て階段になっている。

そして、歩き終わったところは普通の土に戻っている。「鋼の錬金術師だろ、お前」舞久の冗談めいた言葉に「あながち、間違ってないよ」とフラグとも取れる事を言った。

普通なら2時間掛かるのを空理の錬金術みたいなので30分しか掛からなかった。平らな地形に入り、黄金の魔方陣に向けて歩く、そして、黄金の魔方陣に到着した。

「魔方陣の塊だね～これは解けないよ」この黄金の魔方陣の塊は幾千の魔法で固められている。これを解くとなるとスーパーコンピューター並みの頭脳がなければいけない。
「無理ゲーだなこれは、誰かチート能力持ってる奴いないのか」舞久が呆然と魔方陣を眺めていたら
「いるじゃないか、ここに！！」甲高い男の声が響く。全員が声のした方へ振り向くと他のグループがやってきていた。
「俺は４組の花神透弥だ」
「私は４組の医神あろえです。魔法が解けないのであれば即刻立ち去って下さい。邪魔ですから、後子無さんはこちらに来て下さい」と自己紹介した途端に呼ばれ舞久は戸惑う。
「えっ行っていいの？」
舞久が空理に聞くと
「いいよ！犠牲になってね、私達はあなたのことを忘れない」空理は演技しているかのように言い、「ね、皆」と同意を求め「頑張ってね」と笑顔で社が言う。「遠回しに死ねって言ってんの？」「そうなるんじゃない」舞久は泣いた振りをしながら、「もう知らない！寝返ってやる！」と言って花神達の所に行く。
社は待って～ごめんと笑いながら行くが夜音に止められる。「今のうちに少しでも魔方陣を解除しておこう奴の犠牲を無駄にするな」
「そうだね～じゃあ今のうちに」社達は魔法の解除に向かった。

一方その頃舞久はというと「お願いします。あなたしか居ないんです」と医神が必死に頼んでいた。それはもう世界の命運を託すような声音で。
「いや、でもこれは、その…」と舞久が口籠もる。
「なぜですか？貴方はなぜ拒むんですか？好きだと言ったら返事をするでしょう！」そう、今俺は告白されたのだ、それもこの医神という女に。相手は返事を待っている。どうしようか、相手は俺が融合体であることを知らない。知っていたらこんなことは言われなか

った。
『理由を聞いてみたら？』守が凄く久しぶりに話した。お前と話すの久しぶりだな、今まで何してたんだ？『探検してたのよ、舞久の深層世界を、でも長かった～、山あり谷ありでさ、もう大変』お前暇人かよ、ニートになるぞ『うるさいな、それよりなんで好きなのか聞きなさい』まあ、そうだな動機を聞かなきゃな。「あの～なんで私のことが好きになったんですか？」あろえは間髪入れずに
「はい！清楚なところとキリッとしたところとスタイルがいいのと男の子っぽいとかです」大雑把すぎる。『断りなさい、こんな状態で認めても意味はないからね』そうだな
意を決して断ろう！

「医神さん」
「はい！」
あろえは笑顔で一杯だ。断ることに罪悪感が生まれたが、
「気持ちは凄くうれしいけど、ごめ…」
ドオン
鈍い音が響いた。木々が倒れている。炎が逆り森を燃やしていた。
「何だ？この魔法は！」
文献に載っていたような気がするが何の魔法かは覚えていない。「医神！お前は分かるか？」花神の問に医神は「狩人の力だと思う」
「何！？」狩人だと、なぜそんなものがここに。

炎の中から鎌を持った人間らしきものが現れる。
姿は金髪ツインテール、舞久を神軍に招集しようとしたエルンだった。
「なんでお前がここに！」舞久は目を見開く。
その表情を見てエルンは見下すような目をしながら
「子無舞久、あなたを狩りに来たんですよ」
妖艶にさながら悪魔のような形相で告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5162z/

セミナリオ

2011年12月25日23時00分発行